

ぱつくとどうぞぱすと その四〇

女性漫画家と戦争

小学生時代のある放課後、学校の図書コーナーに置いてあった漫画を軽い気持ちで読み始めたところ、恐怖に襲われて最後まで読み通せなかったことがある。それが中沢啓治『はだしのゲン』であり、私にとつての最初の戦争漫画だった。戦時下の日本兵の残虐行為、原爆が投下された広島の惨状、被爆者の後遺症の描写など、今でも脳裏に焼き付いている数多くの悲惨な画面に衝撃を受け、夜になるのが怖い日が何日も続いた。同じく戦争が主題の作品を多く遺した水木しげるの妖怪物は好きで読んでいたが、『総員玉碎せよ!』をはじめとする戦争漫画の方は当時は知らなかった。自身も被爆者だった中沢は二〇一二年に、一世代年長で南方戦線に従軍した水木は二〇一五年に亡くなった。戦後七〇年の節目に、私たちは戦争漫画の巨大な参照点を相次いで失ったことになる。

その一方で、戦争と漫画の関わりが最近大きな盛り上がりを見せている。戦時中の呉を舞台にした、こうの史代の漫画『この世界の片隅に』を、『名犬ラッシー』の片渕須直監督がアニメーション映画化した劇場版の大ヒットである。昨年一月に小規模でスタートした同作は、徐々に全国で上映が広がり、現在も異例のロングランになっている。その間、日本アカデミー賞の最優秀ア

ニメーション作品賞を受賞したほか、キネマ旬報の日本映画ベスト・テン第一位にも選ばれている(アニメーション作品の受賞は『となりのトトロ』以来だというから、その評価がいかに高いかが知られる)。

だが、この作品の成功だけが例外なのではない。ここ数年、この史代『夕風の街 桜の国』『この世界の片隅に』を筆頭に、女性作家による一連の戦争漫画が注目すべき動きをなしているからだ。もちろん、少女漫画の草創期を支えた花村えい子(『君死に給うことなかれ』)や、歴史物で著名な里中満智子(『積乱雲』)のように、戦争の悲劇を後世に伝えようとする作品がこれまでも女性の手で描かれてきた。しかしこれらの作品が少女漫画の枠組みをベースに、恋人を特攻隊に送り出す女性を主人公とした恋愛物語であるのに対し、ここで名前を挙げる一連の作品は趣を異にしている。

たとえば曾根富美子の『親なるもの 断崖』は、室蘭に実在した幕西遊郭を中心に、女性の思想や情念が世代を超えて繋がるさまをダイナミックに描く。おざわゆきは、『凍りの掌』では父親のシベリア抑留体験を、『あとかたの街』では母親の経験した名古屋の大空襲を詳細に漫画化した。この史代も含め、これらの作家は自分の出身地を作品の舞台に選び、綿密な調査や聴き取りに依拠して、ときに記憶されていない歴史すらも発掘している。原作に基づく点で異なるものの、近藤ようこの作品(『戦争と一人の女』『五色の舟』)も、女性による戦争漫画の新しいうねりの

なかに位置づけられる。

さらに独特の立場で戦争の図像化に取り組む作家に今日マチ子がいる。細く可憐な少女の絵が、戦争の場面との強烈な対比をなす。題材も多様で、『Cocoon』はひめゆり学徒隊の集団自決を、『アノネ、』はアンネ・フランクとヒトラーとの起こり得ない遭遇を、『ばらいそ』は長崎原爆を扱っている。

実際に戦争を体験していない彼女たちは、なぜ、どのように戦争漫画を描くのか。「こどものころ戦争がとてこわかった」『Cocoon』あとがき」という今日は、Web上のあるインタビューで、「戦争について今自分が思うことを『記録』」して漫画にするのだと述べている。また、こうの史代は、戦後生まれの人間も戦争経験者と触れている以上、「戦争を知らない世代では決してない」と強調し、彼らと接した「現実」が「わたし達にししか伝える事の出来ない戦争の一面」(『平凡倶楽部』) だという。

戦争は必然的に戦後を生み出す。そして、最終戦争でないかぎり、戦争は戦死者だけでなく生き残りを生む。だから戦前と戦後のあいだに断絶はなく、戦争を挟む歴史はむしろシームレスに続いているというべきだ。戦争を体験したひとたちや証言が日々減っていくなかで、ここで扱った漫画家たちは、自分が戦争をどう想像するのかを「記録」し、残していく世代に属している。その想像の「記録」を読むことで、私たちも戦争について思いをめぐらし、自分自身の経験として引き継いでいく。それが戦後がふたたび戦前にならないために必要な想像力の闘いである。



本文に登場する戦争漫画 + α

(経済学部社会科学システム学科 藤岡俊博)